文献紹介

海外舞踊文献紹介（ドイツ語圏）

小林奈央子

『舞踊學』第24号（2001）にて副島博彦氏が紹介しているGabriele Brandstetter: *Tanz-Lektüren. Körperbilder und Raumfiguren der Avantgarde.* Fischer Taschenbuch Verlag, Frankfurt am Main 1995は，20世紀初頭の身体像ならびに空間造形を舞踊・美術・文学作品から読み解く境界領域研究であった。本稿ではこのような舞踊の境界領域研究から，主に造形芸術における舞踊表象（身体と運動のイメージ）を扱った1980年代以降の研究書を紹介する。

Ⅰ　中世の造形芸術における舞踊表象

①Gabriele Christiane Busch: *Ikonographische Studien zum Solotanz im Mittelalter.* Musikverlag Helbling, Innsbruck 1982.

音楽・舞踊史学者として知られるWalter Salmenの指導による博士論文（インスブルック大学，音楽学）。4世紀から16世紀までのヨーロッパ各地の造形芸術のうち独舞（Solotanz）を扱ったものおよそ500点について，人物像（サロメや道化など），衣装や小道具，伴奏楽器の分類を行い，それぞれの社会的地位に考察を加えつつその変遷を分析している。また，中世の独舞の基本的運動類型についてスケッチ（腕のポーズ・胴の屈曲・逆立ち・ブリッジ他）を付している。本書の章立ては博士論文としては割合に簡素なものであるが，十数世紀間に渡る独舞の変遷を辿る分類表は基礎資料として価値があるだろう。

②Birgit Faßbender: *Gotische Tanzdarstellungen.* Peter Lang, Frankfurt am Main 1994.

ダルムシュタット工科大学博士論文，美術史学。本書では，音楽学分野における中世舞踊研究からの差別化を目的に，各舞踊の主題の多層的な解釈や表現様式変遷の考察に重点がおかれている。扱われている舞踊は独舞・連鎖舞踊（Reigentanz）・三人乃至は二人での舞踊・パントマイム的舞踊・ステップダンス・跳躍舞踊・モレスカ・死の舞踏（ただしこれは限定的に）である。各舞踊の装飾的意義から象徴的意義まで幅広い解釈が提供されており，中世の舞踊表象の考察を網羅するものとなっている。著者はルカ・デルラ・ロビアとドナテロのルネッサンス彫刻に表れる舞踊表象に興味を抱き，その背後にある中世舞踊表象の研究に至ったと述べているが，ロビアの彫刻画集が20世紀初頭に出版されて多くの舞踊家に影響を与えたことと考え合わせると，造形芸術が中世から現代へ舞踊表象の橋渡しをしているようで面白い。

③Jean-Claude Schmitt: *Die Logik der Gesten im europäischen Mittelalter.* Aus dem Französischen von Rolf Schubert und Bodo Schulze. Klett-Cotta, Stuttgart 1992 [org: *La raison des gestes dans l' Occident médiéval.* Verlag Gallimard, Paris 1990].

著者はフランスの中世史家で現社会科学高等研究院教授。1996年に邦訳『中世の身ぶり』（ジャン＝クロード・シュミット著，松村剛訳，みすず書房）も紹介された。本書は直接的に舞踊表象を扱うものではないが，身体表現の儀式化・階級化に伴い成立した中世の身ぶりの論理構造の理解とその読解を目的としており，その文化的背景を知る上で重要な書と言える。

④Marcus Mrass: *Gesten und Gebärden. Begriffsbestimmung und -verwendung in Hinblick auf kunsthistorische Untersuchungen.* Verlag Schnell&Steiner, Regensburg 2005.

ボン大学博士論文，美術史学・キリスト教考古学。本書はジェスチャーと身ぶりの図像分析の問題点を浮き彫りにしつつ，コミュニケーション学の視点から問い直している。各図像の分析に留まることなく，個別事例から広範な事例に対応し得る普遍的な読解法則を導き出す点が特徴的である。

なお死の舞踏については2000年に国立西洋美術館で開かれた展覧会のカタログ『死の舞踏―中世末期から現代―デュッセルドルフ大学版画素描コレクションによる』（国立西洋美術館）の巻末に詳細な文献目録があるためそちらを参照されたい。

Ⅱ　20世紀初頭の造形芸術における舞踊表象

19世紀末から20世紀にかけて各芸術分野は堰を切ったように越境を始めた。この時期の舞踊は音楽・美術・文学など他分野が探求する身体・運動イメージの宝庫として，またそれらの総合の場として機能した。

⑤Christine Farese-Spreken: *Der Tanz als Motiv in der bildenden Kunst des 20. Jahrhunderts (Stilkunst, Expressionismus, Fauvismus, Futurismus).* Druckerei Schulte & Lehmann, Hagen 1969.

ミュンヘン大学博士論文，美術史学・考古学・イタリア文学。本書は1880年代から第二次世界大戦までのヨーロッパ，特にドイツとフランスにおける造形芸術と舞踊を対象とした作品分析研究である。扱う作品数が膨大であるために個々の分析は十分とは言えないが，いかに多くの造形芸術作品が舞踊をモチーフとしているかが一望でき，全

体像を把握するには有用である。

⑥Claudia Maria Cerbe-Farajian: *Bewegung, Rhythmik und Ausdruck in Tanz und bildender Kunst im späten 19. und frühen 20. Jahrhundert und ihr Reflex in den Schriften Aby Warburgs.* Kassel 2001.

カッセル大学博士論文，芸術学。前掲書と同時期を扱っている。舞踊の主要な要素として運動・リズム・表現の三つを選び，それらを切り口に当時の舞踊ならびに造形芸術と人文科学の相互作用を読み解く。その後で美術史家アビ・ヴァールブルクの論考（未出版）を，交錯する三つの要素とそれに付随するキーワードを整理しつつ読解しており，緻密な研究と言える。

文学における舞踊表象を扱った研究も，造形芸術における舞踊表象を理解する上では参照の必要があるだろう。

⑦Leona Van Vaerenbergh: *Tanz und Tanzbewegung. Ein Beitrag zur Deutung deutscher Lyrik von der Dekadenz bis zum Frühexpressionismus.* Peter Lang, Frankfurt am Main/Bern/New York/Paris 1991.

⑧Gregor Gumpert: *Die Rede vom Tanz. Körperästhetik in der Literatur der Jahrhundertwende.* Wilhelm Fink Verlag, München 1994.

⑨Roger W. Müller Farguell: *Tanz Figuren. Zur metaphorischen Konstitution von Bewegung in Texten Schiller, Kleist, Heine, Nietzsche.* Wilhelm Fink Verlag, München 1995.

いずれも博士論文。同じくドイツ語圏文学を対象とした日本の研究書で山口庸子氏著『踊る身体の詩学　モデルネの舞踊表象』(名古屋大学出版会，2006年）が挙げられる。各書では19世紀から20世紀にかけてのドイツ語圏の文学における舞踊表象とその動機が分析されており，当時の舞踊表象の思想的背景を探る上で重要である。

Ⅲ　運動と身体に関する境界領域的論文集

⑩M. Egidi/ O.Schneider et al. (Hg.): *Gestik. Figuren des Körpers in Text und Bild.* Gunter Narr Verlag, Tübingen 2000.

テクストと図像におけるジェスチャーおよび身体についての境界領域研究論文集。本書は境界領域研究会議*Gestik in Text und Bild*の成果をまとめたもので，各編者ならびに論文執筆者は演劇・映画学・文学・美術史学ほか，音楽学・メディア学・哲学・現象学・考古学・民俗学・宗教学等を専門としている。編者の共同執筆による序論では，メディア文化史・パフォーマンス・美術・文学の各分野におけるジェスチャー研究の歩みが述べられている。収録した論文に舞踊表象を扱うものは少ないが，各研究分野それぞれのアプローチが参考になる。

⑪Claudia Jeschke/ Hans-Peter Bayerdörfer (Hg.): *Bewegung im Blick. Beiträge zu einer theaterwissenschaftlichen Bewegungsforschung.* Verlag Vorwerk 8, Berlin 2000.

演劇学の枠組みにおいて運動研究を中心に位置づけるという目的で開かれたシンポジウム（ライプツィヒ，1997年）の成果をまとめたものである。各論はオペラ，スタニスラフスキー，ニーチェ，E.T.A.ホフマンからタンツテアターにビデオタンツなど幅広い対象を扱い，運動の美学が舞台芸術に通底する根本的問いとなり得ることを示している。

書評

ルドルフ・ラバン
—新しい舞踊が生まれるまで—

ルドルフ・ラバン著
日下四郎訳
大修館書店
2007年　318頁

高野　牧子

ルドルフ・フォン・ラバン（1879～1958）はモダンダンスの父と称され，生涯で10冊の著作がある。これまでに『現代の教育舞踊』（須藤智恵，秋葉尋子訳1972），『身体運動の習得』（神沢和夫訳1985）が邦訳され，エフォートおよびラバノーテーションに関する理論と研究の側面が大いに強調されてきた。

本書の原題は『Ein Leben für den Tanz』(1935)であり，これまであまり知られていなかったラバンの様々な舞踊作品に関するラバン自身のエッセイ集である。舞踊作品の創作にむけ，着想や意図，主題や展開などが詳細に綴られている。56歳で回想しながら書かれた本書は，第1部から第3部の構成からなり，初々しい頃から，舞踊家として地位を確立し，イギリスへ亡命するまで，彼の舞踊作品の変遷を見ていくこともできる。ここには舞踊理論家としてのラバンではなく，一人の舞踊家，振付家としての生き生きとしたラバンの姿が蘇ってくる。

第１部は６章から成り，彼の生い立ちを背景に，ついに舞踊に目覚め，新しい舞踊を創作していく過程が読み取れる。

画家志望だったラバンは，祝賀館の室内装飾を手伝う中で，『動く彫刻』を生み出していく。単に絵筆を渡す役割から舞踊家ラバンの誕生は非常に面白い。この出来事を「動く彫刻といったものに，人間の感情や意思を表すはるかに強い表現力が隠されていることに私が気付くには，ある特別なきっかけが必要だった」p.18と振り返っている。動きと表現性の関係を理論化していく萌芽がごく初期に見られるのは興味深い。

また，士官候補生として工場へ派遣され，「物を造り出す技術と夢を織りなす芸術」p.72の対峙の中で，「このころになって私の心の中で，舞踊が私の生涯をかけて身を捧げるべき芸術であるという考えが，初めて頭をもたげてきた」p.83と内省している。

さらに第１部では，彼の作品のインスピレーションとなった個人的体験が多く描かれている。奇想天外な印象を与える物語は彼の柔軟な想像力を示し，感受性豊かな青年期を髣髴とさせる。また新聞社での経験や田園生活での体験が，彼の新しい舞踊の主題に直接大きく影響している。彼の舞踊は，体験によって理解した社会の本質や人間の内面を，カリカチュアしながら外在化することによって，創造されていったのである。

第２部は３章から成る。第一次世界大戦後はラバンが多くの舞踊作品を創作した時期である。最高傑作である『揺れる寺院』では次のような理念を語っている。「常に揺れうごめくこの寺院は舞踊，もろもろの祈りに他ならない舞踊の産物であり，未来のための大聖堂である」p.135と述べ，『揺れる寺院』が内面を外在化する真の舞踊の象徴であったと考えられる。

第３部では「Bewegungs=chor（動きの合唱体）」の形成過程が興味深い。「動きの合唱体」は「高揚した人間存在の新鮮さを，しっかりと体験すること」p.229を主眼に始め，「動きはむしろ単純で，その演技の基本理念にはショー，あるいは舞台作品という考えはまったくない。ユニゾンで見せる揺れと跳び，ゆるやかな踏み出しや激しい歩みと走りによって，ただ空間が征服される」p.228のである。つまり，「動きの合唱体」は様々な動きが調和し，一体となって奏でていく構成的な群舞による造形美であり，他者との一体感や共鳴しあう体験に価値が置かれているのである。しかしながら，ドイツで一気に広まった「動きの合唱体」は最初の理念に反し，政治的な目的も含め，多様な様相を呈したことに，ラバンの困惑が伺える。

上演空間についての記述も随所に見られる。祝典劇『落日のダンス』での屋外パフォーマンスでは「彼の頭が牧場の縁を登りつめた瞬間に，沈みゆく太陽の下縁がちょうど水平線に接触するように工夫されているのである」p.234。まさに日没の時間と地点も計算した上での，自然の中でのパフォーマンスは見事であったろうと感心する。この舞台は真夜中には松明をともし，小妖鬼グループのダンス，翌朝，朝日とともに再び踊りが捧げられ，自然の中での壮大なダンスであったことが伺える。

一方，屋内の劇場として，自然と一体になれるようなキロメーター・ドームや理想劇場の建築図など，挿絵や写真で見ることができる。実現できなかったが，壮大な理想を追い求めていく姿が現れている。

本書は，ラバン自身の人間性にふれ，彼の舞踊思想の源をたどりつつ，ラバンが目指した新しい舞踊，作品が浮かび上がってくる好著であるといえよう。

書評

『冒険する身体――現象学的舞踊論の試み』

石渕　聡 著
春風社
2007年　248頁

荒谷　大輔

石渕聡氏の博士号取得論文の出版がなった。氏は，いうまでもなく，コンテンポラリーダンス・カンパニー「コンドルズ」の創設期からのレギュラーメンバーであり，最近では，ロックバンド「THE CONDORS」の中心メンバーとして活動の幅を広げているが，本書は，そうした具体的な実践の中から，純粋に理論的な考察として紡ぎ出されたものだといえる。「本書では，『観客が舞台の出来事をどのように見るか』という，いわば『観客論』が主として展開されている。だが，多くの着想が，踊る側の体験つまり自分自身の舞踊実践から得られたことも事実だ」と「あとがき」にあるように，本書の議論は，実際の「踊り手」であることを決して特権化することなく，なお通常の観客においては見落とされかねない視点を導入する。論述は，個別的な「舞踊史」に関わるような歴史的な事柄を排除した上で，「舞踊」という現象一般に関わる純粋に理論的な考察として進められるが，そうした中で本書は，舞踊が舞踊として成立する過程を「踊り手」の視点を仮構することなく記述しえている点で，非常に有意義な研究だといえよう。

本書は三部にわかれ，それぞれ，「第一部　舞踊論の基盤――現象学的時間・空間・身体の概念」，「第二部　『舞踊の身体』の構築へ向けて」，「第三部　言語との関係における舞踊の認知」とタイトルが付されている。第一部は，スザンヌ・ランガーやマクシーン・シーツの舞踊論，およびサルトルやメルロ＝ポンティなどの現象学の基礎となる考え方を展開している。第一章では，まず「現象」，「形相」，「志向性」などの現象学における基本的な概念が説明され，第二章では，現象学の「舞踊」への理論的応用の先駆けとなるシーツの議論が，舞踊論として彼女が多くを負っているスザンヌ・ランガーに立ち返りながら，詳述される。ランガーの『シンボルの哲学』や『感情と形式』は，「芸術的シンボル」を「論弁的シンボル」から区別し，「芸術的シンボルに特有の知の体型」を明らかにすることを目的とするものであったが，そこでランガーが提示するのは「芸術の虚性」と呼ばれる概念であった。芸術とは，ランガーにとって，「実在物に埋もれている日常態から形式を解き放つ」，「純粋に質的な非現実のもの」でなければならない。バレリーナの非物質性，磁石のように引き合わされるデュエットなどは，こうした芸術の虚性を示す典型例とされる。これに対してシーツは，ランガーの基本的な考え方を踏襲しつつも，その「虚の現れ」が，時間と空間の形式を有した実在であることを指摘する。「現実と虚」というランガーの対立を，「反省と前-反省」という認識論的な枠組みで修正しながら，シーツは，舞踊芸術を「前-反省的な態度によって観取される現れ」と規定することになるのである。

こうして舞踊理論の先行研究を踏まえた上で，第三章では，第二部以降の本書の議論のひとつの大きな柱となるサルトルやメルロ＝ポンティの議論が参照される。ここでの議論は，部をまたがって直接，第四章（および第六章第二節）の主題につなげられるが，その議論の骨子は，以下のようにまとめられるだろう。ダンサーとしての「私」がダンスを踊るとき，「I dance a dance.」と定式化される事態は，「過去―現在―未来」という時間の三つの様相において捉えられる。「ダンサー」としての「私（I）」は，自らが踊った「ダンス（a dance）」を対象化し，踊ること自体を「過去」へと不断に追いやる。だが，そうして「踊られたダンス」によって，「それを踊るダンサー」の「存在」が累積的に形成されていくと同時に，その「過去」に「踊られたダンス」から抜け出るような仕方で，ダンサーは新たに「ダンス」を踊ろうとするだろう。だとすれば，踊ろうとするダンサーの身体がまず存在するのではなく，踊ることによって「身体」が対象化されてくると考えるべきではないだろうか。サルトルが「対自存在」と呼ぶような存在様態を，踊り手が舞踊を踊る場面に適用しながら，石渕氏は，「ダンサー」としての「私」が，「道具」として対象化されている「身体」とは異なった仕方で存在する有り様を記述するのである。サルトルの議論の枠組の中で「無としての私」と位置づけられる存在様態を，世阿弥の「離見の見」の構造を記述するものとして捉え返しながら，石渕氏は，「舞踊」が「舞踊」として現出する構造を現象学的に記述しようとするのである。

第二部第五章では，観客が舞踊を舞踊として認知する場面をも考察に加えながら，ダンサーと観客のコミュニケーションの構造を記述することが試みられる。「発信者-メッセージ-受信者」という通常のコミュニケーションとは異なり，舞踊においては「発信行為」と「受信行為」が「パフォーマンス」という項を媒介に同時的に行われることが示される。第六章では，マルクーハンのメディア論やメルロ＝ポンティの現象学における図と地の問題が，舞踊という「メディア」に適用され，

第三章，第四章での舞踊の時間論を踏まえた上で，ダンサーを「地（＝メディア）」として「身体」を「図」とする舞踊の構造が説明されている。こうして第二部において，「舞踊の身体」が形成される構造が明らかになるのである。

第三部においては，これまでの論述から一転して言語学をベースにした議論が展開されることになる。一見するところ乖離しているように見える議論は，しかし，「舞踊」が「舞踊」として認知される構造を問うことにおいて，第二部までの議論との連続に位置づけられるだろう。「バラ」という語が，植物の薔薇としての「デノテーション」と，それによって指し示される「情熱」という「コノテーション」と，二つの異なった次元の意味を持ちうるように，現に目にする身体の分節と，その身体が指し示す言語的な意味の次元を区別して考えることができると石渕氏はいう。このとき，日常における「現実の身体」は，それ自身が有用な意味の体系の中に位置づけられているが，しかし，舞踊の身体は，そうした日常の行為の意味連関から離れた形で「純粋な現れとしての身体」を提示する。だとすれば，「舞踊の身体」とは，「日常の身体」が持ちうる「デノテーション」としての意味を解体しつつ，「コノテーション」としての意味作用を提示するものだと考えられるだろう。こうして氏は，「言語的な意味」には還元されない舞踊の意味作用を，記号学の枠組みの中で提示するのである。

第九章においては，舞踊の言語的な認知の構造が記述される。「舞踊」が「舞踊」として認知されるのはなぜか。石渕氏は，その理由を，舞踊と判別しうる身体表象の雛型にもとめる。「観客が舞踊の身体を認知する際には，つねに言語に相当するある身体表象が先行している」。もちろん，こうした舞踊の認知は，すべての舞踊に当てはまるものではない。「即興舞踊を見るとき，観客は雛型による身体の認知システムの機能の限界を超えざるを得ない」のである。だが，氏によれば，こうした「どのような雛型からも逃れている身体に直面したとき」にも，なお「何とかしてその身体を捉えようとする」ところに，舞踊における言語の雛型化の機能が，「否定的」なかたちで見いだせるとされるのである。

このように本書は，「舞踊」という現象に対して，様々な理論的な枠組をもってアプローチが図られているわけであるが，こうした氏の論述は，舞踊理論の裾を広げようとする意欲的な試みだといってよいだろう。現象学のみならず，言語学，メディア論を駆使して展開される議論は，様々な角度から舞踊理論の可能性を照射するものといってよい。しかしながら，まさにそうした多様な理論構成を用いることが，各々の考察の深さや枠組相互の連関を見にくくさせている点があるようにも思われた。例えば，サルトルの議論においてラカンの鏡像段階論を援用することは，仮にそのことが氏の行論上のメリットをもつとしても，逆に，「私」を特権化して語るサルトルへのラカンの批判（というよりも，すでに戯画化された対立となっている構造主義全般のサルトルへの批判）について，氏の議論がとるべき位置を不明確にしてしまうだろう。その点，「パフォーマンス」を媒介にしたダンサーと観客の「コミュニケーション」の問題に直接的に関わる問題と思われるだけに，もう少し丁寧な事柄の腑分けが欲しいように思われた。また，舞踊についての言語学的な分析や，メディア論的考察についても，それぞれの議論が固有にもつ文脈を離れて，その枠組を舞踊に適用する意味が見にくい部分があった。とりわけ，第九章で展開される舞踊の言語的な認知構造の記述は，「言語／非言語」という二項対立を持ち込むことで，逆に舞踊が持ちうる特有の構造を見にくくする恐れはないだろうか。前述のように氏は，「即興舞踊」が，言語的な身体表象の雛型を欠くことを認めた上で，その様態を「舞踊における言語の雛型化の機能」の「否定的」な側面として積極的に記述する。だが，そこで見られる「否定性」とは，「言語／非言語」という枠組で見ることではじめて現れてくる性質であろう。だとすれば，そうした「否定性」によって，舞踊における「非言語的な意味」を「言語化」しうるとしても，それは，舞踊が固有にもちうる構造を積極的に記述するものであるよりもむしろ，ある枠組を当て嵌めることで切り取られたものになるように思われる。

とはいえ，「舞踊とは何か」という根本的な問題について，本書が果敢に仕掛ける理論的な闘争の意義は，十分に評価されなければならないだろう。細かな配慮をもって紡がれる理論の道行きも，後に続く読者の見通しを，広く伸べるものだといえる。理論的な側面においてなされる石渕氏の「冒険」を，今後の舞踊理論の発展へとつないでいくためにも，多くの読者に恵まれるべき本だといえる。